

《泥棒かかさぎ》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニー協会紀要）第16号（2000年4月発行）の拙稿「ロッシニー全作品事典（11）《泥棒かかさぎ》」及び2007年ロッシニー・オペラ・フェスティバル上演DVDのブックレット解説（2010年発売、KKC 9004）。その増補改訂版をHPに掲載します。
(2015年7月)

I-21 泥棒かかさぎ *La gazza ladra*

劇区分 2幕のメロドラマ (melodramma in due atti)

台本 ジョヴァンニ・ゲラルディーニ (Giovanni Gherardini, 1778-1861)

第1幕：全16景、第2幕：全17景、イタリア語

原作 実際に起こった事件に基づいてルイ＝シャルル・ケーニエ (Louis-Charles Caigniez, 1762-1842) とテオドル・ボドウアン・ドービニ (Théodore Baudouin d'Aubigny, 1786-1866) が台本化した3幕のメロドラマ (mélodrame historique en 3 actes) 《泥棒かかさぎ、またはパレゾーの女中 (*La pie voleuse ou La servante de Palaiseau*)》。この作品はルイ・アレクサンドル・ピッチニ (Louis Alexandre Piccini, 1779-1850) の音楽を伴って1815年4月29日²、パリのラ・ポルト・サン＝マルタン劇場 (Théâtre de la Porte Saint-Martin) 初演。

作曲年 1817年3月半ば～5月 (解説参照)

初演 1817年5月31日 (土曜日)、ミラーノ、スカラ座 (Teatro alla Scala 初版台本の記載は R.I. Teatro alla Scala)

人物 ①ファブリーツィオ・ヴィングラディート Fabrizio Vingradito (バス、B♭-e') ……金持ちの地主

②ルチア Lucia (メゾソプラノ、b♭-e') ……ファブリーツィオの妻

③ジャンネット Giannetto (テノール、c'-c#') ……ファブリーツィオの息子、兵士

④ニネッタ Ninetta (ソプラノ、a-b') ……ファブリーツィオ家の小間使い

⑤フェルナンド・ヴィッラベッラ Fernando Villabella (バス、G-f') ……ニネッタの父、兵士

⑥ゴットアルド Gottardo (バス、E-e') ……村の代官 [podestà]

註：台本の中では役名のゴットアルドではなく代官と称される。

⑦ピッポ Pippo (コントラルト、a-f') ……ファブリーツィオに仕える若い農民 [男装役]

⑧イザッコ Isacco (テノール、c'-a b') ……小間物商

⑨アントーニオ Antonio (テノール、c'-g') ……看守

⑩ジョルジョ Giorgio (バス、d-e') ……代官の召使

⑪エルネスト Ernesto (バス、d-e') ……フェルナンドの友人、兵士

⑫村の裁判官 Il pretore del villaggio (バス、G-e')

他に、役人、武装した人々、男女の農民たち、ファブリーツィオの下僕たち、一羽のかかさぎ

初演者 ①ヴィンチェンツォ・ボッティチェッリ (Vincenzo Botticelli, ?-?)

②マリエッタ・カスティリオーニ (Marietta Castiglioni, ?-?)

③サヴィーノ・モネッリ (Savino Monelli, 1784-1836)

④テレザ・ベッロク (Teresa Belloc, 1784-1855) 註：生名と複数の芸名については文末脚注9を参照されたい。

⑤フィリッポ・ガッリ (Filippo Galli, 1783-1853)

⑥アントーニオ・アンブロジー (Antonio Ambrosi, 1786-?)

⑦テレザ・ガリアニス (Teresa Gallianis, ?-?)

⑧フランチェスコ・ビスコッティ (Francesco Biscottini, ?-?)

⑨不詳 註：初版台本に記載なし。

⑩パオロ・ロッシニョーリ (Paolo Rossignoli, ?-?)

⑪アレッサンドロ・デ・アンジェリ (Alessandro De Angeli, ?-?)

⑫不詳 註：初版台本に記載なし。

管弦楽 2フルート/1ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、4ホルン、2トランペット、3トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、2小太鼓、鐘、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ
伴奏楽器

註：トライアングルに演奏箇所が明確な指示がない。現代の演奏ではシンバルも使われるが、その使用は楽譜で前提とされない。これについては全集版序文 pp.XL-XLI.を参照されたい。

演奏時間 序曲：約 9 分半、第 1 幕=約 90 分 第 2 幕=約 95 分

自筆楽譜 リコルディ社資料庫、ミラーノ

初版楽譜 N. Simrock, Bonn e Colonia, 1819. (ピアノ伴奏譜。レチタティーヴォ・セッコ含まず)

Gio. Ricordi, Milano, 1828. (ピアノ伴奏譜。レチタティーヴォ・セッコを含む完本の初版)

註：全集版序文では刊年が 1828-29 年とされたが、現在は 1828 年で確定。

Castil-Blaze, Paris, 1824. (総譜初版。カスティル=ブラーズによるフランス語改作 3 幕版。改変箇所が多い)

全集版 I/21 (Alberto Zadda 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 1979.)

楽曲構成 (全集版に基づく)

序曲 [Sinfonia]：ホ長調、4 分の 4 拍子、マエストーゾ・マルツィアーレ〜ホ短調—ホ長調、4 分の 3 拍子、アレグロ

【第 1 幕】

N.1 導入曲〈おお、なんと幸せな日 *Oh che giorno fortunato!*〉(ルチーア、ピッポ、ファブリーツィオ、かささぎ、合唱)
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈なんてこった！もう 11 時を過ぎている *Oh cospetto! undici ore già passate*〉
(ルチーア、ピッポ、ファブリーツィオ)

N.2 ニネッタのカヴァティーナ〈喜びで心が踊っているわ *Di piacer mi balza il cor*〉(ニネッタ)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈おお、どんなに私のジャンネットが *Oh come il mio Giannetto*〉(ニネッタ、ルチーア、ファブリーツィオ)

N.3 イザッコのカヴァティーナ〈紐に編み針 *Stringhe e ferri da calzette*〉(イザッコ)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ねえ、イザッコ爺さん *Oh, senti il vecchio Isacco*〉(ニネッタ、ピッポ、イザッコ)

N.4 合唱〈あら、あの音は！ *Ma qual suono!*〉とジャンネットのカヴァティーナ〈この腕の中において *Vieni fra queste braccia*〉(ニネッタ、ピッポ、ジャンネット、合唱)

N.5 ピッポの乾杯 [Brindisi]〈杯を持ち、飲みましょう *Tocchiamo, beviamo*〉(ピッポ、合唱)
— 乾杯の後のレチタティーヴォ〈ああ、お母さん、まだぼくに何も言っていないよね *O madre, ancor non mi diceste nulla*〉(ニネッタ、ルチーア、ピッポ、ジャンネット、ファブリーツィオ、フェルナンド)

N.6 レチタティーヴォ〈昨日、日暮れ時に *Ieri, sul tramontar del sole*〉、ニネッタとフェルナンドの二重唱〈どう涙をこらえたら！ *Come frenar il pianto!*〉(ニネッタ、フェルナンド)

N.7 代官のカヴァティーナ〈用意はできた *Il mio piano è preparato*〉(代官)
— 二重唱とカヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈もう一杯、もう一杯 *Un altro, un altro*〉(ニネッタ、ジョルジョ、代官、フェルナンド) 註：N.6 の二重唱を含め、「二重唱とカヴァティーナの後の」という位置づけ。

N.8 シェーナ〈取り急ぎ、目印をお送りいたし候 *M'affretto di mandarvi i contrassegni*〉と三重唱〈(ほっとしたわ) 可愛い娘！ (Respiro.) *Mia cara!*〉(ニネッタ、代官、フェルナンド)
— 三重唱の後のレチタティーヴォ〈ああ、ぼくのお腹も満足し *O pancia mia, tu dei*〉(ニネッタ、ルチーア、ピッポ、ジャンネット、イザッコ、ファブリーツィオ、代官、かささぎ)

N.9 第 1 幕フィナーレ〈ファブリーツィオ・ヴィングラディート閣下の家にて *In casa di Messere Fabrizio Vingradito*〉(ニネッタ、ルチーア、ピッポ、ジャンネット、イザッコ、ファブリーツィオ、代官、合唱)

【第 2 幕】

— レチタティーヴォ〈この恐ろしい牢獄に囚われ *In quell' orrendo carcere rinchiusa*〉(ニネッタ、ジャンネット、アントーニオ)

N.10 ニネッタとジャンネットの二重唱〈たぶん、いつの日か分かってくれるでしょう *Forse un dì conoscerete*〉(ニネッタ、ジャンネット、アントーニオ)

— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈ああ、酷い運命よ！ だが、どうして *Ah destino crudel! Ma perché mai*〉(ニネッタ、アントーニオ、代官)

N.11 代官のアリア〈そう、可愛い子ちゃん、お前のために *Sì, per voi, pupille amate*〉(ニネッタ、代官、男声合唱)
— アリアの後のレチタティーヴォ〈代官、代官め！ やってくれたな *Podestà, Podestà! Tu me l'hai fatta.*〉(ニネッタ、ピッポ、アントーニオ)

N.12 レチタティーヴォ〈ねえ、明日のことを考えてみて *Deh pensa che domani*〉、ニネッタとピッポの二重唱〈そ

れなら私の形見として *E ben, per mia memoria*〉(ニネッタ、ピッポ)

— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈可哀想なニネッタ！…でも本当に彼女が *Infelice Ninetta!...Ed è poi certo* (ルチーア)

N.13 シェーナ〈誰がいるの？ フェルナンド！ ああ、神様！ *Chi è? Fernando! Oh Dio!*〉とフェルナンドのアリア〈盗みで訴えられた…なんと恥ずかしい！ *Accusata di furto...oh rossore!*〉(ルチーア、フェルナンド)

— アリアの後のレチタティーヴォ〈哀れなフェルナンド！…私もまた *Sventurato Fernando!...Ed io pur sono*〉(ルチーア)

N.14 レチタティーヴォ〈満場一致で有罪だ *A pieni voti è condannata*〉、合唱と五重唱〈民よ、慄くのだ *Tremate, o popoli*〉(ニネッタ、ジャンネット、ファブリーツィオ、代官、フェルナンド、裁判官、合唱)

— 五重唱の後のレチタティーヴォ〈やっと私の気持ちも *Ora mi par che il core*〉(ルチーア)

N.15 ルチーアのアリア〈この胸に *A questo seno*〉(ルチーア)

— アリアの後のレチタティーヴォ〈なんて村だ！ *Che razza di villaggio!*〉(ピッポ、アントーニオ、ジョルジョ、エルネスト)

N.16 第2幕フィナーレ〈不幸で、哀れな娘 *Infelice, sventurata*〉(ニネッタ、ルチーア、ピッポ、ジャンネット、アントーニオ、ジョルジョ、ファブリーツィオ、代官、フェルナンド、合唱)

物語 [時の指定なし。場所はパリからさほど遠くない大きな村との設定]

【第1幕】

ファブリーツィオ家の中庭(柱の鳥かごにかささがちが見える)。戦場から村に戻った同家の息子ジャンネットのために召使が祝いの準備をしていると、ピッポがかささがちに翻弄されて笑い者になる。ルチーア、次いで夫ファブリーツィオが現れ、今度は息子に嫁を探さねばと話していると、かささがちが「ニネッタ」と言うので一同大喜びする(N.1 導入曲)。だがルチーアは、あの娘は以前銀のフォークを失したと言って快く思わない。

イチゴを摘んで戻ったニネッタが恋人の帰還に胸をときめかせていると(N.2 ニネッタのカヴァティーナ)、女主人は改めてフォークの話を持ち出して注意を促す。そこに巡回商人イザッコが現れ(N.3 イザッコのカヴァティーナ)、すぐに追い返される。農民たちの歓呼に迎えられたジャンネットはニネッタと再会し、二人は皆の祝福を受ける(N.4 合唱とジャンネットのカヴァティーナ)。ピッポの音頭で一同祝杯を上げる(N.5 ピッポの乾杯)。

独りきりになったニネッタの前に、父フェルナンドが現れる。彼は軍隊でいざこざを起こして死刑宣告を受け、脱走してきたのだ。父は娘に自分の持ち物である高価なスプーン(イニシャルのF.V.が刻まれている)を託し、それを売って代金を栗の木に隠すよう頼む。父と娘が不幸な運命を嘆いていると(N.6 レチタティーヴォ、ニネッタとフェルナンドの二重唱)、代官がニネッタを誘惑しにやってくる(N.7 代官のカヴァティーナ)。ニネッタは父のことを「哀れな旅人」と言って取り繕うが、折悪しく脱走兵の手配書が届く。メガネを持たない代官から読むよう求められたニネッタは、とっさに父とは異なる年齢と人相を読み上げてやりすごす。娘を口説く代官にフェルナンドの怒りが募り、代官もニネッタにふられて憤るなか、かささがちがスプーンを盗んで飛び去る(N.8 シェーナと三重唱)。

ファブリーツィオ家の1階の部屋。イザッコが来たのでニネッタは父から預かったスプーンを売り、口止めする。ルチーアとファブリーツィオが来て食器を数えると、スプーンが1本足りない。居合わせた代官は、「盗みをした召使は死刑だ」と言い、犯人探しが始まる。脱走兵の娘であることを知られたニネッタは、イザッコに売ったスプーンの代金が盗みの証拠にされてしまう(転売したイザッコはイニシャルがF.V.だったと述べ、ファブリーツィオ家の品と誤解される)。一同混乱するなかニネッタは逮捕され、連行されていく(以上、N.9 第1幕フィナーレ)。

【第2幕】

牢獄の玄関の間。ニネッタは、彼女に同情する看守アントーニオにピッポへの伝言を頼む。そこへジャンネットが面会に来る。彼は恋人の無実を信じるが、ニネッタは死を覚悟している(N.10 ニネッタとジャンネットの二重唱)。

代官が現れ、自分の言うことをきけば助けてやると持ちかけるが(N.11 代官のアリア)、ニネッタは拒絶する。怒った代官は「判決の後で泣こうとわめこうと手遅れだ」と捨て台詞を吐き、法廷に向かう。ニネッタはピッポに恋人への形見を託し、二人は泣きながら別れを告げる(N.12 レチタティーヴォ、ニネッタとピッポの二重唱)。

第1幕と同じファブリーツィオ家の部屋。ルチーアがニネッタは無実かもしれないと考えていると、フェルナンドが現れる。彼は自分の娘が盗みで訴えられ、裁判が始まると知って愕然とする(N.13 シェーナとフェルナンドのアリア)。



《泥棒かささがち》全曲のチェンバロ独奏編曲 (ザウアー&ライデスドルフ社、1825年。筆者所蔵)

代官の屋敷の裁判の間。法廷で投票が行なわれ、ニネッタの有罪と死刑が宣せられる。ジャンネットは「彼女は秘密を隠している」と訴えるが、ニネッタは沈黙したまま判決を受け容れようとする。そこに飛び込んできた父フェルナンドが娘の命乞いをし、脱走兵として逮捕されてしまう。誰もが同情を禁じえないが、どうすることもできない (N.14 レチタティーヴォ、合唱と五重唱)。後悔の念に苛まれるルチーアは、ニネッタを自分の娘として迎えたいと思い直し、神に祈る (N.15 ルチーアの Aria)。

群集が見守るなかニネッタは刑場に向かい、教会の前で立ち止まると祈りを捧げ、再び歩き始める。その間に、金をさらって飛び去ったかささぎを追って鐘楼まで来たピッポが、かささぎの隠していた食器類を発見する。ピッポとアントーニオは鐘を叩いて村人を集め、これまでの盗みはすべてかささぎの仕業とふれまわる。かくして疑いの晴れたニネッタはジャンネットと結ばれ、一同これを喜ぶ (N.16 第2幕フィナーレ)。

解説

【作品の成立】

《オテッロ》と《ラ・チェネレントラ》に続いて作曲された《泥棒かささぎ》は、ロッシーニの 21 作目のオペラに当たる。スカラ座との新作契約は 1816 年 10 月にミラーノとナポリを文書でやり取りする形で結ばれたが、契約書は現存しない (当時ロッシーニはナポリで《オテッロ》を作曲中だった)。ロッシーニが署名した契約書 (10 月 29 日付) を受け取ったスカラ座の共同興行師アンジェロ・ペトラッキ (Angelo Petracchi, 1762-1843) は、11 月 9 日付の返書で出演者にベッコク、モネッリ、ガッリの 3 人が決まり、台本作者はフェリーチェ・ロマーニ (Felice Romani, 1788-1865) を予定し、題材も「かなりコミカルで優美な、俗悪でないフランス劇から採られるだろう」と述べ、候補のあることを仄めかしている³。

1817 年 1 月 25 日にローマで《ラ・チェネレントラ》を初演して大成功を収めたロッシーニは、2 月 11 日にローマを発ってボローニャに里帰りし、3 月初旬ミラーノに到着した。しかし、その間に問題が持ち上がっていた。彼は前年興行師ペトラッキに対し、自分の義務を果たすためできるだけ早くミラーノに行くことと約束していたのに履行せず、ペトラッキは 2 月 5 日付の手紙⁴でこれを非難するとともに、ロマーニも台本を書き進めていると述べているのだ。けれどもその手紙を受け取る前にロッシーニはローマを立ち、ミラーノに着くとロマーニが用意していた台本を却下し、スカラ座でお蔵入りとなっていたジョヴァンニ・ゲラルディーニ (Giovanni Gherardini, 1778-1861) の《泥棒かささぎ》が選ばれることになった。ロッシーニが母に宛てた手紙 (3 月 19 日付) から、この台本に対する作曲家の第一印象が読み取れる——「ぼくは完璧に健康です。《泥棒かささぎ》と題されたオペラを作曲します。台本が経験の浅い詩人によって書かれているので気が狂いそうです: でも題材は最高に美しく、(神様のお気に召せば) 私たちは嫌な失敗を喫するよう願っています」⁵。ここでの「嫌な失敗 (Fiasco Fotuto)」が反語的なジョークであることは、続く手紙 (日付なし) に冗談めかし、「ぼくはひどい音楽 (una porca musica) を競っていました」と記したことで判る⁶。

ゲラルディーニはミラーノに生まれ、パヴィアで薬学を学んだ後に文学に転じ、1806 年から 15 年までイタリア王国の官報である『イタリア新聞 (Giornale Italiano)』の主幹を務め、1817 年にはアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル (1767-1845 フリードリヒ・シュレーゲルの兄) を翻訳紹介してドイツ・ロマン派思潮のイタリアへの導入に貢献することになる。《泥棒かささぎ》の台本はロッシーニのために書かれたのではなく、1816 年 4 月にペトラッキがスカラ座で公募したオペラ台本コンクールに『裁判官たちへの警告 (Avviso ai giudici)』の題名で応募した作品で、原作を 1815 年 4 月にパリで初演されたルイ＝シャルル・ケーニエ (Louis-Charles Caigniez, 1762-1842) とテオドル・ボドゥワン・ドービニ (Théodore Baudouin d'Aubigny, 1786-1866) 共作の 3 幕のメロドラマ《泥棒かささぎ、またはパレゾーの女中 (La pie voleuse ou La servante de Palaiseau)》に求めていた (事実上の翻訳改作)。

このコンクールはスカラ座での上演を前提に公募され、その要綱には「2 幕物」の劇で「長すぎず、短すぎず」、「現代の趣味に即して Aria よりもいわゆるアンサンブル (pezzi concertati) が豊富にあり」「斬新さとスペクタクルの壮麗さが結びつき」「少なくとも登場人物の一人は喜劇的であること」などの条件が付されていた⁷。一等賞はロマーニの『青銅の頭、または人けのない小屋 (La testa di bronzo ossia La capanna solitaria)』が獲得し、『裁判官たちへの警告』は落選したが、審査員の一人で高名な詩人ヴィンチェンツォ・モンティ (Vincenzo Monti, 1754-1828) はこれを高く評価していた。オペラの台本としてこなれていなくても、その筋立てにはロッシーニも魅せられたに違いない。

ロッシーニは 3 月 19 日前後に作曲を始め、5 月 半ばに完成していたことが母宛の手紙から判る——「オペラ [の



最初期のピアノ伴奏譜(ブライトコプフ&ヘルテル社、1820年。筆者所蔵)

作曲]が終わりました。今月26日に上演されるでしょう。うまく行くよう期待しますが、ぼくは興行師や政府等々とトラブルがありました。いまはすべて終わり、ぼくは満足しています」(5月17日付) 8。スカラ座では《泥棒かささぎ》の初演に先立ち、同じ歌手団による《幸せな間違い》が人気を博していた(4月26日初日、29回公演)。

当時スカラ座のマエストロ・アル・チェンバロを務めていたのが後にヴェルディの師となるヴィンチェンツォ・ラヴィーニャ(Vincenzo Lavigna,1776-1836)で、彼は《パルミラのアウレリアーノ》の初演(1813年)でもマエストロ・アル・チェンバロを務めていた。オーケストラの指揮者兼コンサート・マスター(役職名はPrimo Violino, Capo d'Orchestra)はパガニーニの師として知られる優れたヴァイオリニスト、アレッサンドロ・ロッラ(Alessandro Rolla,1757-1841)が務めた。ロッラは1802年から同職にあり、スカラ座管弦楽団の水準向上に貢献していた。舞台美術と装置は新古典主義的な構図を用いたアレッサンドロ・サンクイーリコ(Alessandro Sanquirico,1777-1849)が新たに手がけた。

歌手団も一流メンバーで構成されていた。中でもニネッタ役のテレザ・ベック(Teresa Belloc,1784-1855)は当時の北イタリアを代表するプリマ・ドンナで、ロッシーニ最初の成功作《幸せな間違い》イザベッラの創唱歌手でもある9。父フェルナンド役のフィリッポ・ガッリ(Filippo Galli,1783-1853)も当代一流のバス歌手で、《アルジェのイタリア女》ムスタファや《イタリアのトルコ人》セリムなど数多くの重要役を創唱し、ロッシーニの信頼を得ていた。



サンクイーリコによる《泥棒かささぎ》スカラ座初演の舞台図(1817年)

【特色】

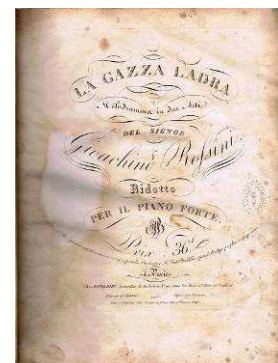
《泥棒かささぎ》はオペラ・セミセリアのジャンルに属している。その起源は18世紀中頃のフランス演劇で流行した「救出物(pièces à sauvetage)」や「お涙頂戴劇(comédie larmoyante)」にあり、身分社会を背景に農民や庶民が不当に罪を負われ、最後に救われるという構図が基本にある。感傷的な要素はピッチニの《良い娘》(1760年)やパイジェットの《ニーナ》(1789年)に採り入れられ、救出劇としてはケルビーニの《二日間》(1800年)や一連の《レオノール [又はレオノーラ、レオノーレ]》作品(ガヴォー [1798年]、パーエル [1804年]、ベートーヴェン [1805年]など)を生み出した。ロッシーニ作品はファルサ《幸せな間違い》(1812年)を皮切りに、《トルヴァルドとドルリスカ》(1815年)、《泥棒かささぎ》(1817年)、《マティルデ・ディ・シャブラン》(1821年)の計4作がこれに該当する。

《泥棒かささぎ》の音楽は独立した序曲と16のナンバーからなり、序曲[シンフォニア]は単独に演奏される機会も多い名曲で、冒頭の二つの小太鼓の連打が処刑を暗示する。続く壮麗な音楽とクレシェンドを採り入れたアレグロは、ロッシーニがイタリア随一の管弦楽作曲家であったことの証明となる。序曲のモチーフは、代官のアリア(N.11)とニネッタとピッポの二重唱(N.12)にも使われる。

続くナンバーはそれ以前のロッシーニ・オペラと趣を異にし、主人公ニネッタのソロは登場カヴァティーナ〈喜びで心が踊っているわ(Di piacer mi balza il cor)〉(N.2)のみで、コントラルトのピッポ役のソロも乾杯の歌〈杯を持ち、飲みましょう(Tocchiamo, beviamo)〉(N.5)しかない。ジャンネット役もテノールの主役としては影が薄く、唯一技巧的なカヴァティーナ〈この腕の中において(Vieni fra queste braccia)〉(N.4)も、とってつけたように感じられる。ドラマの展開からすれば、第2幕の幕切れは救出されたニネッタの大アリアやロンドがふさわしいのに、旧弊なアンサンブル・フィナーレで処理している。これは前記のようにスカラ座が「現代の趣味に即して」アリアよりも重唱やアンサンブルを中心にした作劇を台本に求めた結果で、ロッシーニも異論がなかったようだ。ヒロイン、ニネッタの姿が強く印象づけられるのも、父の窮地が明らかになる三重唱〈ほっとしたわ 可愛い娘! ([Respiro.] Mia cara!)〉(N.8)、牢獄の場でのピッポとの二重唱〈それなら私の形見として(E ben, per mia memoria)〉(N.12)、処刑場への行進(第2幕フィナーレ)である。フィナーレ冒頭の葬送の音楽とニネッタの祈りも秀逸で、光と影のコントラスト、長調と短調、強弱のニュアンスは絶妙というほかない。

フランス初版ピアノ伴奏譜初版(ボワエルデュー社、1820-21年。筆者所蔵)

レチタティーヴォ・セッコとレチタティーヴォ・アッコムパニャートの使い分けも良く考えられ、セッコに続いてハ短調の総奏で始まるシェーナ〈取り急ぎ、目印をお送りいたし候(M'affretto di mandarvi i contrassegni)〉(N.8 冒頭)の劇的効果も見事である。オペラ・セリアの手法の音楽が随所にあり、意識的に喜劇的な音楽語法を控え、イザッコのカヴァティーナ〈紐に編み針(Stringhe e ferri da calzette)〉(N.3)も「鼻声(nasale)」で、旋律の冒頭13小節が一つの音(d[♯])だけを歌う趣向はあるものの、あえて滑稽さを強調していない。これに対し、代官役がパッ・ブッフオの性格を併せ持つことは、第1幕のカヴァティーナ〈用意はできた(Il mio piano è preparato)〉か



らも明白である。

それ以前には見られなかった特色に、ドラマに沿った第1幕フィナーレの劇的な進行や、葬送行進曲を含む第2幕フィナーレが挙げられる。序曲にオペラ本編の素材を用いるのは同じスカラ座で初演した《パルミラのアウレリアーノ》に前例があり、これはオーストリアの支配下にあるミラーノの観客がドイツ音楽に親しんでいることも関係するようだ。旧作の楽曲の転用や素材の借用が絶無であるのも異例で、ピッポの乾杯の間奏に木管楽器が奏する、後のパリ時代のバレエ音楽を先取りするかのようなダンス音楽も異色と言える。個々の人物の性格も巧みに音楽で表現されており、《泥棒かささぎ》はニネッタと父フェルナンドの感情表現の豊かさにおいて《ラ・チェネレントラ》（事実上のロッシーニ最後のオペラ・ブッフアで、抒情的な作風への転換点となる作品）の延長上にあり、シリアスな劇的表現において《オテッロ》の系譜に連なっている。

【上演史】

1817年5月31日にスカラ座で行われた初演は成功を収め、シーズン中に27回の公演が行なわれた（ウルバーノ・ガルツィア [Urbano Garzia, ?-?] 作曲のバレエ《チーロの勝利 (*Il trionfo di Ciro*) と《森の中の魔法 (*La magia nel bosco*)》が併演されたと思われる)¹⁰。ロッシーニは初演から3日後の母宛の手紙に、上機嫌で成功を報告した——「なんと嬉しや嬉し [*Allegri allegri per Dio*]。ぼくの《泥棒かささぎ》が天に達しました。ぼくは、かくも神々しいシンフォニアからこのように熱狂が始まるなんて記憶がありません。劇場の端からこだまのように二つの小太鼓が交差したのが成功したのです。続く第1幕には、三つ四つのオペラを作るだけの音楽がぎっしり詰まっています。第1幕の後、ぼくは物凄い騒ぎのなか舞台に呼ばれました。あなたに保証しますが、素晴らしく歌った歌手団も呼ばれました。第2幕は最初の音から最後まで、熱狂の連続しかありませんでした。[中略] 台本がとても美しく、ぼくも夢中になってそれに作曲しました」（6月3日付）¹¹

初演の様態を伝える6月7日付『コッリエーレ・デッレ・ダメ (*Corriere delle Dame*)』¹²は、台本、歌手、オーケストラ、サンクイーリコによる舞台装置を称賛しながらも、ロッシーニの音楽に対しては保守的な立場から苦言を呈している。同じ6月7日付『ミラーノ新聞 (*Gazzetta di Milano*)』には、こう記されている——「名歌手たちは《泥棒かささぎ》の中でかなりたくさん、たぶんたくさんすぎるほど歌う。ベック夫人は舞台に出ずっぱりだが、そのためには大変な苦勞に抗う鉄の肺が一つ必要だ。彼女は自分の役を熟練と同等の熱意をもって果たす。やかましい管弦楽も彼女とガッリ氏の声に勝つことはできない。上演が終わるとガッリとロッシーニの両氏は、舞台の上で思いやりを込めて抱き合った。それを見た聴衆すべての眼から、涙が川のように流れた」¹³。

最初の再演は同年12月4日ピザで行われ、翌1818年ヴェネツィア、ペーザロ、ルーゴ、ルッカ、フィレンツェ、1819年パレルモ、リヴォルノ、ローマ、ジェノヴァ、ナポリ、フィレンツェ、ボローニャ、トリノー、ヴェネツィアと続き¹⁴、ロッシーニは1818年のペーザロ、1819年と1820年のナポリ上演に関与して楽曲のカットと追加、差し替えを行った（概要は本稿末尾の付記で明らかにする）。

国外での上演は1817年11月のミュンヘンを皮切りに、1819年1月6日グラーツ（独語上演）、同年5月3日ウィーン（同。ケルントナートーア劇場）、11月22日ブダペスト（同）、12月2日バルセロナと続き、1820年にリスボン、1821年にサンクト・ペテルブルク（ロシア語上演）、マドリッド、ロンドン（キングズ劇場）、パリ（王立イタリア劇場）、1822年にバルリオン（演奏会形式）、ダブリン（英語改作版）、リールとブリュッセル（共にカスティール＝ブラーズによる仏語版）、クラウゼンベルク（ハンガリー語）でも上演された。その後も全世界で上演をみたが、1840年以降は激減し、イタリアでは1858年、フランスでは1867年のイタリア劇場最後で、1883年11月のニューヨークが19世紀最後の上演となった¹⁵。

20世紀の蘇演は1941年8月21日、ペーザロ新劇場で行われた（指揮：リッカルド・ザンドナーイ、3幕改作版）¹⁶。その後も1959年ウェックスフォード音楽祭、1965年フィレンツェ五月音楽祭を含めて若干の再演をみたが、作品の真価は批判校訂版の最初のヴァージョンによる1973年11月24日ローマのオペラ座公演で明らかにされた（指揮：アルベルト・ゼッダ、ニネッタ：林康子、ピッポ：ルチア・ヴァレンティーニ）。批判校訂版の決定版は1980年8月28日、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル (ROF) のオープニング公演で使用された（指揮：ジャンドレア・ガヴァツェーニ、ニネッタ：ハダマ・ヨウコ [葉玉洋子]、ピッポ：ヘルガ・ミュラー・モリナーリ）。ROFでは1981年（指揮：アルベルト・ゼッダ、ニネッタ：ハダマ・ヨウコ、ピッポ：エレーナ・ツィリオ）、1989年（演出：ミヒャエル・ハンペ、指揮：ジャンルイージ・ジェルメッティ、ニネッタ：カーティア・リッチャレッリ、ピッポ：ベルナデッタ・マンカ・ディ・ニッサ、代官：サミュエル・レイミー）、2007年（演出：ダミアノ・ミキエレット、指揮：リュウ・ジャ、ニネッタ：マリオラ・カンタレロ、ピッポ：マヌエラ・クステル、代官：ミケーレ・ペルトウージ）に再演され、2015



1980年ROFプログラム

年には2007年と同じミキエレット演出で上演される。日本初演は2008年3月7～9日、藤原歌劇団が行った（東京文化会館大ホール。演出：ダヴィデ・リヴァーモア、指揮：アルベルト・ゼッダ、ニネッタ：チンツィア・フォルテ／高橋薫子、ジャンネット：アントニーノ・シラグーザ／五郎部俊朗）¹⁷。

付記：

ロッシーニの関与した上演における主な変更を、全集版序文と校註書に沿って次に示す。

◎1818年6月10日ペーザロ、ヌオーヴォ [新] 劇場

ペーザロに再建された新劇場（Teatro Nuovo）のこけら落としに際して、ロッシーニは新たなキャストのために楽曲のカットや差し替えと追加を行った。但し、新曲を書かずに旧作（《試金石》《トルヴァルドとドルリスカ》《アルミーダ》）の楽曲を再使用。主な変更は次のとおり¹⁸。

- 1) 第1幕ニネッタとフェルナンドの二重唱（N.6）の前にフェルナンドのアリア〈Dunque invano i perigli e la morte〉を追加。原曲は《トルヴァルドとドルリスカ》（1815年）第1幕導入曲のオールドウ公爵のソロ。歌詞を変更して10小節を追加（楽譜は全集版《泥棒かささぎ》N.5 bis）。
- 2) ピッポの乾杯（N.5）を削除し、ピッポ役のシェーナとアリア〈Quel dirmi, oh Dio! Non t'amo〉を三重唱（N.8）の後に追加。原曲は《試金石》（1815年）第1幕クラリーチェ登場のカヴァティーナ。オリジナルのまま再使用と推測。
- 3) 第2幕ニネッタとジャンネットの二重唱（N.10）を《アルミーダ》（1817年）第1幕アルミーダとリナルドの二重唱〈Amor! (Possente nome!)〉と差し替え。歌詞を部分的に変更しただけで再使用と推測。
- 4) 第2幕ルチーアのアリア（N.15）の削除。そのカットは初期の再演で定着していた。

ロッシーニが監督した公演は大成功を収め、24回上演された。このペーザロ・ヴァージョンは、ほぼ同じキャストによる1818年秋にルッカのパンテラ劇場（Teatro Pantera）でも使われた。

◎1819年7月15日ナポリ、フォンド劇場

王立劇場の名歌手——コルブラン、ダヴィド [ダヴィデ]、ノッツァーリ、アンブロージ、ピザローニ——による上演であることから、個々の歌手に沿って次の改変を施した。

- 1) ピッポの乾杯（N.5）を合奏付きレチタティーヴォとアリア〈Beviam, tocchiamo a gara〉に差し替え。アリアの原曲は《デメトリオとポリービオ》（1810年作曲、1812年初演）第1幕シヴェーノのアリア〈Pien di contento in seno〉。レチタティーヴォは新たに作曲し、アリアは歌詞を変え、伴奏管弦楽の楽器を増やして借用（楽譜は全集版《泥棒かささぎ》N.5a）。
- 2) 第1幕ニネッタとフェルナンドの二重唱（N.6）をフェルナンドのレチタティーヴォとアリア〈Barbara sorte!〉と差し替え。同役をノッツァーリが務めることが理由の一つで、これに伴い続くレチタティーヴォの歌詞も変更（楽譜は全集版N.6a）。
- 3) 第2幕フェルナンドのアリア（N.13）の削除と、これに伴うレチタティーヴォ・アッコムパニャートからレチタティーヴォ・セッコへの変更。
- 4) 第2幕ルチーアのアリア（N.15）削除の踏襲。

◎1820年8月9日ナポリ、サン・カルロ劇場

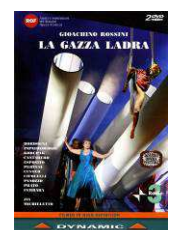
フェルナンド役の新創歌手フィリッポ・ガッリが出演することから、前年行った改変からニネッタとフェルナンドの二重唱（N.6）を元に戻し、第2幕フェルナンドのアリア（N.13）を新たなシェーナとアリア〈Oh colpo impensato!〉と差し替え（楽譜は全集版N.13a）。

◎その後のロッシーニの関与

その後ロッシーニが関与したと思われる上演に、1822年ヴィーンとこれに続くパリの王立イタリア劇場がある。パリでの上演は第2幕フェルナンドのアリアの差し替え版（N.13a）の採用とルチーアのアリア（N.15）の削除を踏襲し、ヴィーンに関しては新たな変更に関する情報を欠く。その後ロッシーニは、1866年に自宅の夜会で歌ったジュゼッピーナ・ヴィターリ（Giuseppina Vitali, 1845-1915）に第1幕ニネッタのカヴァティーナのヴァリアツィオーネ、翌1867年パリのイタリア劇場上演でニネッタを歌うアデリーナ・パッティ（Adelina Patti, 1843-1919）にカデンツァやヴァリアツィオーネを書き与えた。

推薦ディスク

- ・2007年8月ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演 ダミアノ・ミキエレット演出、リュウ・ジャック指揮ボルツァーノ&トレント・ハイドン管弦楽団、プラハ室内合唱団 マリオラ・カンタレロ(S/ニネッタ)、マヌエラ・クステル(Ms/ピッポ)、ディミトリ・コルチャック(T/ジャンネット)、アレックス・エスポーゼット(Br/フェルナンド) ミケーレ・ペルトウージ(B/代官) ほか キングインターナショナル KKC 9004 (DVD 日本語字幕付。廃盤)



-
- ¹ 全集版《泥棒かささぎ》序文 p.XXII.は Baudouin を Badouin と誤記。
- ² 全集版《泥棒かささぎ》序文 p.XXII.は 25 日とするが、多くの文献は初版台本の「29 日」を採用している。
- ³ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol.I, 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro, 1992., pp.188-189.
- ⁴ Ibid., pp.195-197.
- ⁵ Ibid., pp.207-208.及び Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa-Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.162-163.[書簡 IIIa.88]。
- ⁶ *Lettere e documenti IIIa*, p.164.[書簡 IIIa.89] ロッシーニは《ラ・チェネレントラ》が大成功を取めた後にも「ぼくのひどい音楽 (mia Porca Musica)」と書いている。そうした表現は当時の自信の裏返しであり、文字通りに受け止めると理解を誤る。
- ⁷ A cura di Emilio Sala, *La gazza ladra* (I libretti di Rossini 2), Fondazione Rossini, Pesaro, 1995., p.24. 原作と台本に関する情報は同書に基づく。
- ⁸ *Lettere e documenti IIIa*, p.164.[書簡 IIIa.89]
- ⁹ 生名: マリーア・テレーザ・オッターヴィア・ファウスティーナ・トロンベッタ (Maria Teresa Ottavia Faustina Trombetta)。トリノのレージョ劇場に 17 歳でマリーア・テレーザ・ジョルジ (Maria Teresa Giorgi) の芸名でデビューし、1804 年に 19 歳でミラーノのスカラ座のプリマ・ドンナとなり、06~07 年にも同劇場のプリマ・ドンナを務めた。その間アンジェロ・ベッコロと結婚し、芸名に「Teresa Giorgi」「Teresa Belloc」「Teresa Bellocchi」「Teresa Giorgi [-] Belloc」「Teresa Belloc [-] Giorgi」が使われ、現在の文献では主に「テレーザ・ベッコロ Teresa Belloc」もしくは「マリーア・テレーザ・ベッコロ Maria Teresa Belloc」が使われる)
- ¹⁰ 《泥棒かささぎ》の初版台本に、この二つのバレエの題名が記載されている。但し、台本は掲載されず。
- ¹¹ *Lettere e documenti IIIa*, pp.173-177.[書簡 IIIa.93]
- ¹² 全集版《泥棒かささぎ》序文 p.XXIII.に引用されている。
- ¹³ Vittorio Della Croce, *Una giacobina piemontese alla Scala*, Eda, Torino, 1978., p.112. なお、スタンダールは『1817 年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』(1817 年)と『ロッシーニ伝』(1824 年)の中で初演に列席したと述べているが、事実ではなく、新聞批評を盗用している。拙著『プリマ・ドンナの歴史 II』(東京書籍、1998 年) pp.219-20.を参照されたい。
- ¹⁴ 以上 1819 年末までの上演記録は、A cura di Marcello Conati, *Contributo per una cronologia delle rappresentazioni di opera di Gioachino Rossini avvenute in teatri italiani dal 1810 all'anno teatrale 1823*. (in *Atti dei convegni lincei 110, La recezione di Rossini ieri e oggi. Roma 18-20 febbraio 1993*, Accademia nazionale dei lincei, Roma, 1994., pp. 231-250)] に基づく。
- ¹⁵ 国外での上演記録は Alfred Loewenberg, *Annals of Opera 1597-1940*, John Calder, London, 1978., pp.654-655.に基づく。
- ¹⁶ 1937 年 11 月 24 日プロツワフで新たなドイツ語改作版が上演されたが、正式蘇演とは見なされない。
- ¹⁷ これに先立ち 2007 年 4 月 22 日、津田ホールにて南條年章オペラ研究室がピアノ伴奏演奏会形式で全曲演奏した。
- ¹⁸ 全集版《泥棒かささぎ》序文 p.XXX.に基づく。以下 1819 年ナポリ以降のそれは pp.XXX-XXXIV.参照。